

高浜虚子

夏目漱石



夏  
目  
漱  
石



彼は閑ひまを見出みいだせばこの道後温泉に来た。別に石鹼せっけんを塗り立てたり、手拭いでごしごしとあらったりするでもなく、唯ただ心の赴くままに湯の中に浸ったり又出たりしてぼんやりと時間を過ごした。石段に腰を掛けて脚の下部を湯に浸したままで、手を膝の辺に置いたり、時に手拭いで背中に湯をかけたりにして体の冷えるのも忘れていた。漸く体の冷えるのに気がつくくと又湯の中に浸った。

彼は又この鮎屋ふなやという宿にはじめて西洋料理の出来

ることを知って、よくそれを食いに立ち寄った。それは東京あたりで食う西洋料理よりはまずくって硬かったがそれでも我慢して食った。彼は折角この田舎の宿屋が西洋料理を作り始めたのにそれを食うものが少なくなつてはたちま忽ち又止めやはしないだらうかということを心配していた。それで屢々しばしばそれを食いに立ち寄ったのは奨励の心持ちでもあるのであった。

彼は松山の中学校で英語を教えていた。彼の大学の卒業論文は十八世紀の英文学といふのであったが、この田舎の中学校で教える教科書は程度の低いものであった。

それでも間々、<sup>ま</sup>その教科書の中に立派な小説や詩の一片があつた。彼は鮎屋の硬い西洋料理を噛むよりはもつと熱心に忠実に咀嚼<sup>そしやく</sup>して生徒に講義をしてやつた。けれども彼の懇篤な講義を本当に受け取る生徒は余りないように彼には思われた。それ許<sup>ばか</sup>りかその生徒の多くは彼が学殖を尊敬するよりも寧<sup>むし</sup>ろ彼の世俗に疎いのを軽侮する傾<sup>かたむ</sup>きがあるように彼には思えた。彼はそれを楽しまなかつた。粗末な不愉快な校舎の中でそれらの生徒に程度の低い英語を教えて、それで粗野なその田舎者の生徒から軽侮されるのは決して楽しい日課ではなかつた。彼は

早くこの地を去りたいと思うことも一再ではなかつたが、彼をこの地から引き離し兼ねるものに唯一ただつの道後温泉があつた。彼は学校をすませて帰ると手拭いを手にして早速この温泉に出掛けた。日曜日などは石手川いしてがわから石手寺いしてじあたりを散歩してその足でこの温泉に浸つた。彼がこの温泉に浸る時の心持ちは極めて純な清い静かなものであつた。その頃の道後温泉には今程の浴客はなかつた。彼は時に御影石の新しい石段に腰をかけてその足の甲を温泉の中に遊ばせながらこの温泉を唯一人で占領しているような心持ちでいることもあつた。彼は又石槽せきそうか



ら落ちて来る温泉に自分の肌を打たせつつ自分の体を大理石像の如く、それに落ちかかる湯を銀の柱の如く考えることもあった。自分の手の先から白い布ざらしの如く温泉の中に棚引いている手拭いを彼は天人てんにんの肩から流れている五彩さいの切かきれと眺めることもあった。彼はかくの如くして過ごすこの温泉の中の時というものを普通の世間の時というものと同じには考えたくなかった。強しいて類るいを求むればそれは彼が静かなる灯火ともしびの下に会心の書に読み耽るその間にすぎ行く時と似たものであった。

「自分はこの温泉あればこそこの地に留まるのだ。」

彼は温泉の中に浸りながらそう考えた。自然がこの辺鄙の田舎にかくの如くして下くだした天恵を彼は不思議に眺めた。清透なるその質、好適なるその温度、尽くることなきその量、あたかも彼が書物を透して得え来る哲人の智じや情じょうや徳と似通うたものがあつた。彼の目に粗野と映じ軽薄と映じ偏狭と映ずるこの田舎の人情風俗は彼の忍がたび難い所のものであるが、唯この温泉あることによつて彼はここに哲人の座下にあるが如く唯一の慰藉いしやを見出すのであつた。

彼がこの温泉に通う路で最も多く出逢うものは四国遍

路であつた。それは年とつたもの、若いもの、男、女、病人、子供、あらゆる人間を包含していた。いずれも背に着ているおいずるに寺々の判をもらつた四国八十八個か所の巡拝しよを証明していた。彼が石手寺に行つた時にそこには殊に沢山の遍路を見出した。仏殿の前に立つて一時間も二時間もの長い間去ることを惜しむものの如く祈願をこめているものもあり、この上歩あゆみを運ぶことの出来ない疲れ果てた人のように、ぐたりと石の上に腰を下ろして杖を両手に体を支えているものもあり、又盲いている子の手をひいて親子一緒に声を揃えて仏を念じている

ものもあり、又顔や手の見るも恐ろしく壊れているものもあり、それらの人が彼処かしこにも此処ここにも、唯御仏みほとけの力で救われようとして一生懸命になっているのが彼の心を痛ましむる許りばかであった。

「これ等らは久しく見るに堪えない醜い世界だ。」

彼はそう考えて、いつも歩を返した。彼は元来この石手寺の堂塔の古い建物として特に美術的であることに興味を覚えてよくここに足を運ぶのであったが、唯この四国遍路のいたましい一群ほうちやくに逢着することによって長くそこに佇まることをようしなかつたのである。

唯同じ四国遍路もそれが道後の町の温泉煙りの間に見出される時は全く違った感じを彼に与えた。ある時彼は石手寺から今少し石手川の上流に散歩を試み、日暮れ近くになって道後の町に這はい入った時にそこに一群の遍路を見出した。その遍路は先に石手寺で出逢ったところのものであって、それらは病人でも片輪でもないただの健康な人であったが、それでいて一分ぶでも一寸でも仏の利益の多からんことを希ねがうように一生懸命に祈願を籠めていた。それがここでは全く種類の違った人のように暢のん気な顔をしてゆっくりとこの温泉町ゆのまちを歩いているのを見た。

それから時に立ちどまっては評議をしているのはこれ等を泊めることを営業としている遍路宿のどれを選ぼうかを詮議しているのであった。彼は石手寺を背景とした遍路よりもこの温泉町ゆまちを背景とした遍路の方が今宵この温泉の町まちに泊まることが出来た。それらの遍路が今宵この温泉の町まちに泊まって草臥くたびれを温泉おんせんに医いする事を思うとふと彼の心はかの石手寺で得た痛みから容易たやすく救われることが出来るのであった。

彼は独り遍路ばかりでなく、この国の遠い田舎からは固もとより、瀬戸内海の島々、広島県その他この土地の人か

らも言わせると向え地と言われている中国辺の細民の病を医するため、この温泉に集まって来る人々の多いのを明らかにした。そうしてこれらは大方木賃と称える安宿に起居していることを知った。彼はそのことを知って後のち町を歩くたびにそれらしいものに沢山出逢った。それ等は皆貧しい服装をしていたが大方温泉に浸ってうだつような顔をしていた。彼はこれ等の人々を見るたびに軽い快こころよさとおかしさを覚えた。

彼が熊本の高等学校の教諭に榮転して松山を去らねばならぬと極きまった時、彼はこの地の人情風俗に別るること

を惜しまなかつたが、唯この道後温泉と離れねばならぬことを悲しんだ。彼は出発の前日長い時間をこの温泉に費やした。

彼は熊本の高等学校から英国に留学し、帰朝して東京の高等学校に転じ大学の講師をも兼ねてそこで英文学を講じた。またその傍かたわらに試みた彼の創作は忽ち落陽の紙価を高らしめた。彼はついに大学の教師を一擲てきして新聞社の聘へいに応じ作家として立った。彼は須臾しゆゆにして文壇の第一人者になった。彼はその間に病やまいを得た。そのち天は長く彼に齡よわいを仮かさなかつた。



この後半期における彼の活動、彼の盛名、彼の得意、それは果たして彼自身でも予期しておったところのものであつたらうか。まことに彼の後半生は花やかな目ざましいものであつた。しかも彼が道後温泉を浴びながらそこに味みわつた純いな清い時をその後彼は再び彼の「時」のうちに見出みし得たかどうか。それは疑問とすべきである。彼とは夏目漱石の事である。



日本文学電子図書館

---

伊予の湯

著 者：高浜虚子

出版者：森知之

制作者：宮澤一郎

大正8年4月15日 発行

---

日本文学電子図書館